（第3種郵便物認可）

エッセー 心のしおり

よし。京都へ行こう

鳴海　風

なるみ・ふう　作家。1953年生まれ。東北大大学院機械工学専攻修了後、日本電装（現デンソー）入社。92年『円周率を計算した男』で歴史文学賞受賞。2006年、日本数学会出版賞受賞。関孝和数学研究所客員研究員。愛知県美浜町在住。

紅葉が始まるころの嵯峨野は、観光には絶好の季節だ。京都の中心部よりも京都にやって来た感じがするのは、新幹線車内の広告の影響とばかりはいえないだろう。それでも、「そうだ京都、行こう」というノリで出かけてくる人たちは多いはずだ。

実は、嵯峨野は、日本の数学の発祥の地と言ってもいい。

江戸時代の大ベストセラー『塵劫記』をご存じだろうか。商人が必要とする実用的な計算や、ねずみ算のような趣味の問題を、豊富な挿絵とともに解説した数学書である。『塵劫記』は、江戸時代、多くの数学ファンを生み出した。

嵯峨野はその『塵劫記』の著者、吉田光由（一五九八～一六七三年）が生まれ育ったところである。近刊『江戸の天才数学者』（新潮選書）で紹介した八人の数学者のトップバッターに光由を据えた。和算（江戸時代の数学）発展の導火線に火をつけたのが彼だからだ。

大堰川（保津川）などの開削で知られる角倉了以・素庵父子は、光由の親戚である。そもそも角倉家の本姓は吉田という。角倉一族は豪商や医者、学者の家系である。光由も数学だけでなく土木工事にも秀でていた。

朱印船貿易に取り組んでいた角倉一族は、南蛮人との交流があった。その中には宣教師もいたろう。一族の文化レベルが国際的なのは、そういった理由がある。しかし、光由の時代になるとキリスト教は禁止され、キリシタンの疑いをかけられると運が悪ければ火あぶりだった。

光由の墓が見つからないのも、キリシタンの疑いをかけられたため、所在すらわからないようにして、そのまま墓も建てられなかったという説が有力だった。

『江戸の天才数学者』でもそう書いた。

ところが、出版後すぐ「吉田光由の墓が見つかったの、知りませんでした？」とメールが来た。嵯峨野で生まれ育って数学を教えている、現代の光由のような知人からで、前から光由の遺跡案内をお願いしていた。

こうなったら「よし。京都へ行こう」である。

紅葉した嵐山を背景に、渡月橋をたくさんの観光客が渡っていた。川幅いっぱいにしぶきを上げて落ち込む水の白さが鮮やかだ。目的を異にしている我々は、人々の流れに逆らっているようで歩きづらい。

嵯峨野随一の紅葉の名所といわれる常寂光寺に着いた。そこの山門の右側に大きな石碑がある。『塵劫記』刊行三百五十年を記念して建立された顕彰碑だ。常寂光寺にある理由は、創建のときに豪商角倉家が土地を寄進したからだ。

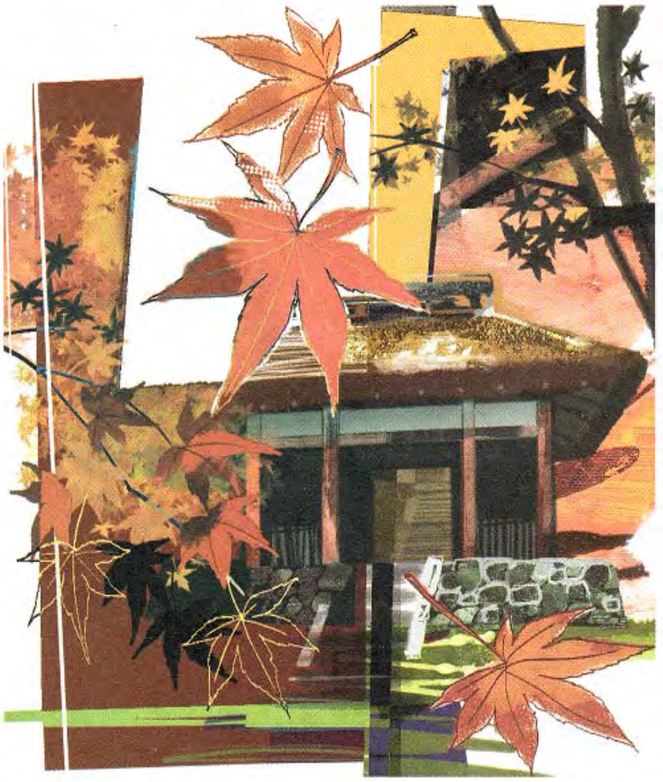
二尊院に着くころ、観光客はいっそう増えていた。広い参道を抜けて右へ折れ、坂道をのぼっていくと、林の中に角倉や吉田一族の墓石がずらりと並んでいる。

これまで光由の墓はないとされてきた。私も、角倉了以や素庵の墓を見て満足していた。知人が、吉田一族の墓石群の中の一つを指さした。表面はかなり磨滅しており、文字の判読は困難だった。

続いて、光由が若いころに完成させた、菖蒲谷隧道（トンネル）へ向かった。

嵐山・高雄パークウエイの途中に、菖蒲谷池がある。これは光由が造った人造池で、彼は長尾山の固い岩盤を穿って、直指庵のあたりへ出る水路を造った。

取水口のある一帯は立ち入り制限地区で、観光客は影さえない。四百年近くが経過した今も北嵯峨地域を潤している水音を聞いていると、私は自分だけの京都を見つけた気がした。



絵・安藤　邦子

注）この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。